

70 眼科秘伝書の彩色眼病図譜の特長

奥沢 康 正

中国の明時代の古典眼科書には挿図としての非常に抽象的な、図案化された眼病図譜を散見するが、日本では秘伝書の中のみ特に彩色された眼病図譜が著しく発展した。この理由には難解な五輪八廓説の自然哲学的理論を理解するよりも臨床経験を重きにおいた外眼部の一病変を一病名とし、多くの鑑別疾患があることを暗に示唆した、単に写実的な病像を示す目的よりも疾患のパターン化を計ろうとした、外眼部疾患の分類は「外障」として形式化・図像化し易かった等、様々な要因が考えられる。馬嶋流切紙に画かれた眼病図譜及び眼病図譜の成立については馬嶋流に求める等、すでに福島義一氏の報告を見るが、秘伝書と称される写本類の中には日本で版刻された明時代の中国医書『眼科全書』『審視瑤函』『銀海精微』『景岳全書』『原機啓微』、日本で刊行された眼科書

『眼目明鑑』『眼目精要』『眼科提要』『眼科撰要』『眼科錦囊』等さらに本草書から眼科領域の治療箇所を明らかに抜粋して転写したと思われる秘伝書、一八〇〇年代になると日本で翻訳された眼科洋書の筆写本類も秘伝書として伝わる。これらの秘伝書と称する写本類の内容に口伝、秘伝と記載される箇所も随所にみられるが、演者は特に眼病図譜の記載を見る秘伝写本中、筆写年の比較的明確な30点を選び、眼病図譜を年代順に外眼部疾患に画かれている図譜の形式、総数をはじめ記載された病名と図譜の順序、彩色法、口伝、秘伝記載文との関係、馬嶋流と他流派との図譜の相違点等をパソコン画像に取り込みこれを比較調査した。病名及びその所見の上又は下に載る図譜がその病状をリアルに表現している図譜は少なく、又同一流派の図譜にも一部異なりを見た。結論的に述べると、江戸期の写本類は中国医書の影響を一部認めながらも、杉田立卿の西洋眼科翻訳書『眼科新書』の刊行にもかかわらず、眼病図譜は幕末まで多くの流派の秘伝書に書き留められており、オランダ医学の影響が認められる図譜は皆無であった。結果病像の臨牀的観察による、

記録表現された写實的・実用的図譜と言うよりも、秘伝書に重みづけを持たせる為、と同時に一部備忘録的及び形式的に敢えて図像化したものであると考える。今回調査した眼病図譜の載る秘伝書はエーザイクすり博物館、研医学会、杏雨書屋、千葉大学（眼科教室）、京都大学（富士川本）、東京大学（医学部）及び演者の所蔵するものである。

（京都府立医科大学）